九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Barbey d' Aurevilly の réalisme と romanesque (II)

田中, 榮一

https://doi.org/10.15017/2332641

出版情報：文學研究. 82, pp.53-60, 1985-03-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

Barbey d' Aurevilly の réalisme と romanesque (II)

田　中　榮　一

【承前】 これまでは，Barbey d'Aurevilly の réalisme に対する思考を追って来たが，ここで彼の「小説」なるジャンルそのものに対する考えを見よう。「小説」に関しての彼の基本姿勢は，19世紀に驚くべき発展を遂げたこのジャンルは，詩，歴史，哲学などと比肩し得る「全く近代的な生産物」[1] であり，また，「ドラマ」とはその筋と情熱により同等であり，その描写と分析により勝っているとしている。彼によれば，この小説の技法としての描写と分析とが，他のジャンルより「小説」を優れた生産物としている所以のものである。小説は人間と社会との総合研究であり，そのため小説家には多種多様の才能が要求されねばならないとする。なかんずく，想像力と観察力とがその最大のものであり，これなくしては人物，事件の創造，発展もなく，人間本性に迫ることは不可能であろう。更に Barbey d'Aurevilly は，「人間と社会との綜合研究」である小説に，「細部の歴史的正確さ，忠実さ」を求めている。ただここから G. Corbière-Gille [2] も指摘しているように，Barbey d'Aurevilly の小説が，単なる精細な考証にのみ頼るものと速断してはならない。この点が彼の蔑視する réalistes たちと一線を画する所である。例えば Goncourt の "Germinie Lacerteux" に対する評言を見よう。

> ...M de Goncourt... dit dans la préface de sa Germinie Lacerteux que le roman est une enquête sociale. C'est possible. Les enquêtes se font partout. Mais, certes! il est autre chose encore, et que ne voient pas assez ces statisticiens et ces nosographes du roman, allant, de réflexion et de préférence, à tout ce qui est laid,

odieux, ignoble, comme à des curiosités bonnes à peindre, ——infatigablement et sans les tacher jamais de la lumière du moindre idéal. [3]

確かに小説は社会調査ではあるが，彼の考える社会調査はまた特別なもので，「統計学者」，「疾病学者」である réalistes たちには充分にその理解がなく，好んで彼らは醜いもの，下劣なものへの好奇心へと走る。この結果，彼らの小説は俗悪性に落ち込み，読者の興味をそそらないものとなる。Barbey d'Aurevilly の小説の理念は，もちろん現実に根ざさなければならないが，何よりもそれには知性の参加が望まれ，それは現実そのものを転調し，日常生活を醇化するものでなければならない。故にこの小説における知的要素，すなわち小説醇化の要素が彼の小説では優位を占めることとなる。Barbey d'Aurevilly にとっては，小説とは，

...doit être d'abord une idée,——puis une action,——et enfin tout un développement de nature humaine sous ses trente-six faces, avec un dénouement qui éclaire le tout d'une suprême clarté ! [4]

まずひとつ思想であり，それからひとつの筋である。そして人間本性の多種多様の面の展開であり，最後に至高の光によって輝らされる結末となる。この小説観はまさに Barbey d'Aurevilly の小説そのものの解説である。小説一般を述べながら，期せずして自己の小説の特質に融れることになった。殆どの彼の小説はこのパターンにはまる。導入部の緩やかさ，事件の展開のまどろこしさ，そして結末部分への急転直下，そしてその意外性と神秘性。更にそれが "suprême clarté" によって明白化されねばならない。それには彼の言う「知性」の介入が必至となるのである。また小説中の事件のあり方も次のようでなければならない。

> ...il faut que les événements sortent des développements et du choc des passions et des caractères, et non pas que les passions et les caractères y soient, comme dans les sots hasards de la vie, emboîtés dans les événements. [5)]

すなわち，事件なるものは，人間情念と性格との葛藤から生れてくるものでなければならず，愚かしい日常生活におけるように，事件の中にはめ込まれた情念，性格といったものではない。つまり既成の事件も描くのではなくて，人間の情念，性格より来る事件が問題となるべきである。従って Barbey d'Aurevilly の小説の理念は，まず人物の設定，構想が先決であり，性格の特殊性，その情念の展開に最大の関心が置かれるべきであるとする。こうした理念をもつ彼の小説の人物が，日常生活から遊離した独特の神秘性をもつことが理解される。

ここで Barbey d'Aurevilly の小説の特質へと論を進めたい。上に見たように，現実を醇化し，理想にまで人間情念の研究を高めるのが彼の小説の特質の一面であるとすれば，すなわち，小説の心理的側面が彼の小説の大きな特徴としてとらえられる。さらに，これも彼の小説の特質として挙げうるもので，それが彼の小説 romanesque の側面につながる大きな要素と考えうるものがある。すなわちそれは，彼の小説の大半に見られる地方色，つまりは故郷の Saint-Sauveur-le Vicomte, Valognes への執着である。この二つの町の描写は，あたかも親に対する如き畏敬の気持と昔日の想い出に満ちている。ひとつの町角や，そこを夜歩いて来る人物にまでその感情がこもっている。例えばこの点に関して彼の次の言葉がある。彼の小説 "Le Chevalier des Touches" や "L'Ensorcelée" は，

> ...livre qui, malgré la donnée romanesque du sujet, a pourtant la fidélité d'une chronique et qui peint notre Normandie avec l'amour

filial que Walter Scott trouvait sous ses pinceaux, quand il peignait sa vieille Ecosse. [6]

上記の二つの小説は特に彼の故郷での出来事を主題としたもので，ノルマンディが愛着をもって語られている。またここで特筆すべきは，彼の Walter Scott への傾倒である。その地方色，歴史色に学び，Walter Scott が古きスコットランドを描く時の血縁の愛情を高く評価していることである。Barbey d'Aurevilly の感受性は，彼の生地の強い影響を受けている。その土地は，「新鮮で，生気があり，豊かな土地ではあるが，突如としてメランコリーが侵入し，また不安な雰囲気，俊厳な局面が立ち現れる」のである。彼はその土地で，広い意味での "réalisme" を学んだに違いないが，それと同時に，夢と理想とを育む "romanesque" も大きくなっていった。多くの批評家は，ノルマンの矛盾した性格を指摘している。偏狭ではあるが，大胆，実際的ではあるが神秘性も持ち合わせ，節約家ではあるが，時により大へんな浪費家にもなる。Barbey d'Aurevilly にもこうした性格の矛盾が強く現れている。彼の批評の過激さと慎重さにも見られるものであり，これは要するに "réalisme" と "idéalisme" との葛藤と考えてよい。生れた土地で彼は広い意味での "réalisme" を学んだ，と前述したが，次の言葉がそれを裏付ける。彼によれば作家という者は，幼少の時から自ら見たもの，注目したもの，いわば自己の内に刻み込まれたものをしか十分に描くことができない。[7] 従って，小説家は，実際の事柄からその想を得て，自ら観察した現実の人物からそのモデルを選択することとなろう。しかもそれに加うるに，その現実を醇化し理想化する知性と想像力の介入が絶対に必要となるのである。以上が彼の "réalisme" であり，いわゆる réaliste たちの "réalisme" とは異質のものである。作家の想像力の重要性は次の文においても強調されているところである。

...Le Roman! mais c'est de l'histoire, toujours, plus ou moins, des faits souvenus, agrandis, modifiés, arrangés selon l'imagination, mais en restant dans la Vérité de la Nature. Il n'y a pas de romancier dans le monde qui ne se soit inspiré de ce qu'il a vu et qui n'ait jeté ses inventions à travers des souvenirs! [...]Ah! que d'histoires qui touchent plus ou moins à des personnes de ma connaissance et qui sont des blocs de Roman équarris dans mon atelier. L'idéal a ses pieds dans le sang que nous avons vu couler ou dans les larmes que nous avons dérobées et tout est moisson pour l'artiste. Si on savait les *Réalités* que les plus grands livres nous cachent!...[8)]

ここでもやはり作家は自己の見たもの，想い出を通してインスピレーションを受け，想像力によりそれらを大きくし，修正し，整理するのであるが，あくまで「自然の真理」の内に留まらねばならないとする。また人物についても作家の既知の人物に多少とも類似し，その理想は彼らの流した血や涙の中にあり，作家はそれを醇化し抽出するのである。

さらに，想像力の重要性については次の文においても見られる。

...Les hommes, en effet, ne s'intéressent qu' à ceux qui leur ressemblent, et c'est la raison qui les fait s'émouvoir et se passionner aux œvres dans lesquelles ils ont affaire à des hommes comme eux. Les enfants seuls font exception parce qu'ils ont la naïveté et la foi de l'enfance. Ils croient à tout ce qu' on leur raconte, ogres ou fées, mais ce sont là des *contes* et non pas des *romans*! L'imagination des hommes est plus difficile. Elle peut accepter ce qui l'étonne et ce qui lui est supérieur, mais elle ne veut pas de ce qui l'écrase——et.on l'écrase, quand on veut la faire s'intéresser à des créatures hors nature et qui ne sont plus en proportion avec elle. Alors, du coup, les sources de l'émotion et du pathétique sont taries...[9)]

上述の人物についての見解を再びここに取りあげ，人々は自己によく似た人物にしか興味を示さず，そうした人物の登場する作品にのみ感動し，熱中するものである。ただ子供たちは例外で，彼らは語られるものを信ずるが，これは“conte”であって“roman”ではない。大人たちの想像力はよりやっかいなもので，彼らを驚異させるものに関心を抱く。そこにこそ読者の感動があり，共感がある。従って，小説の主人公という名に価する人物は，読者の心にくい込み，夢想の中に出現し，いはば読者につきまとって離れない人物であり，遂には読者はその人物を実際に見たと信じてしまう，そのような人物でなければならない。そのためには，作家はひとつと規則に従わねばならず，これを念頭においておくことが必要である。その規則とは，小説の主人公とは，日常の人生においてわれわれから最も遠くに存在する人物である。しかしこれは外的な位置によって遠いという意味では決してなくて，その人物の感情，情念の深奥において遠くの存在であるという意味である。美徳においても，悪徳においてもわれわれの日常から遠い存在，これこそ Barbey d'Aurevilly が小説の“héros”と称える人物である。彼は特にこの点を力説している。そして例えば“Les Diaboliques”各篇でも具現したように，この特異な人物の中に，彼の“romanesque”が生きているのである。

彼は言う，

> ...le droit de *tout* peindre, s'ils (les romanciers) sont vraiment des peintres puissants...Seulement, il reste ceci... : ont-ils peint leur monstre individuel avec le sentiment qu'ils auraient dû mettre dans leur peinture pour qu'une telle horreur fût sauvée par la beauté de la peinture et par l'impression tragiquement morale, qu'elle devrait laisser dans les coeurs ? [10)]

作家はすべてのものを描く権利がある。ただしそれはその作家が真に力強い画家である場合に限られる。また，作家が自己の選んだ「怪物」を，それを描

くにふさわしい感情をこめて描いたであろうか。それなくしては，描写の美しさによっては描かれた戦慄を救うことができないし，読者の心に悲劇的な倫理的印象を留めることはできないであろうとする。

Barbey d'Aurevilly も時代の流れに抗しきれず，"Le chevalier des Touches" は1850年代初期に書き初められたものである故，冒頭の3章は彼の好む手法の "public imaginaire" の設定に長々と費しているのである。この小説は，"réalisme" と "romanesque" がいかに彼の小説技法において矛盾となり，またあからさまに "romanesque" の優位を示したかを見るのに格好の作品である。冒頭の3章の réalisme 的手法は，当代の他の作家の如く，"réel" になりたくその努力も認め得るのである。必要以上の "réel" な描写が読む者にも理解し得る。またこの小説は既に1855年来育まれてきたもので，数年前より批評の分野に筆をそめた彼として，この年より再び「小説」に戻る姿勢が見てとられ，この小説への意欲が感じられるのである。第5章以下は彼本来の技法にかえり，réalisme への努力よりも romanesque の姿がそのまま文の流れとして現れて来るのである。

Barbey d'Aurevilly にとっては "réalisme" とは，外形に過ぎないものであり，前述の如く彼も一応の努力をしたものの，やはり作家としての彼の体質に合わないものと自ら意識したのである。そして，"romanesque" なるものは，すなわち心理的優位を示すものであり，彼の小説に対する理念である事実を醇化し，理想化するに欠くべからざる要因であり，またそれが彼の作家としての本来の姿でもあることを恐らく意識したであろう。そして "Romantique attardé" なる名称は，やはり Babey d'Aurevilly にはふさわしい名ではなかろうか。〔完〕

[注]

(1) Gisèle Corbière-Gille : "Barbey d'Aurevilly, critique littéraire", p. 175.
(2) Ibid., p. 177.
(3) "Le Roman contemporain", pp. 153–154.
(4) "Les Romanciers", 1re série, p. 194., cité par G. Corbière-Gille.
(5) "Les Bas-Blues", p. 261., cité par G. Corbière-Gille.
(6) "Lettres à Trébutien, II", p. 222., cité par G. Corbière-Gille.
(7) Cf. "Le Roman Contemporain", p. 140.
(8) "Lettres à Trébutien, II", pp. 127–128., cité par G. Corbière-Gille.
(9) J. Péladan : "Le Vice suprême", p. XIII.
(10) "Journalistes et Polémistes. Chroniqueurs et Pamphlétaires", p. 228.